木田市長の ど～んとコミュニケーション

真珠のように輝くまちづくりのために

vol.48

離島甲子園

８月６日から９日の間、島根県隠岐の島町において、「全国離島交流中学生野球大会」が開かれました。

いわゆる離島甲子園と呼ばれている大会で、元ロッテオリオンズのエース村田兆治氏の呼びかけにより、昨年からスタートしました。

昨年は答志中学校野球部が参加し、三位の好成績でした。今年は、菅島、坂手出身の鳥羽東中学校の選手と答志中学校の選手の連合軍で参加し、優勝が期待されましたが、「勝負は時の運」、一回戦で地元隠岐の島町の中学校に延長戦の末、敗れ去りました。

試合に勝つことも大事ですが、それ以上に４泊５日の日程で新しいチームメートとの交流を深め、さらにほかの島々の生徒さんたちとの交流も実現できたことは、大変有意義であったと思います。

市内に数多くの中学生諸君がいる中で、このような体験ができることについても感謝しなければならないということも、選手のみなさんにお話させていただきました。

わたしもこの大会日程の前半、隠岐の島を訪れることができました。島の形が似ているところなどは、以前行ったことのある屋久島を思い出させる風情がありました。本土から時速70㎞の高速船で１時間余りかかり、料金も５千円以上必要で、島の生活は大変だという印象でした。

手つかずの大自然、昔からの島送りの歴史、突き牛などが観光の目玉ではありますが、にぎわいは十分ではないように見受けられました。

また、島には漁業もありますが、漁業に従事している人よりも、建設・土木に従事する人の方が倍も多いということであり、公共事業に頼ってきたところも大きいのではないかと感じました。

厳しい自然条件と地理的条件の中ではありますが、これだけ本土から距離が離れていると、逆に、「この島で生活していくんだ」という気概が生まれてくるのではないかとも感じました。

村田兆治氏は、現役引退後、ご自身のライフワークとして離島訪問をされているそうです。そして、厳しい生活環境下にある離島の青年たちに「夢と希望と勇気を」という考えのもと、離島甲子園を提唱されたそうです。

参加された生徒たちの大いなる成長を期待し、合わせて隠岐の島が今後、日本海の楽園として発展することを祈りたいと思います。

人権文化の花を咲かせよう

Vol.86

メディア・リテラシー

毎朝、複数の新聞に目を通していた時期がありました。新聞によって取り上げる記事が違うのは、簡単に想像できます。しかし、同じ事柄について書かれていても、わたし自身の受け取り方が、全く同じということがほとんどないことに驚きました。

メディア・リテラシー（英語：media literacy）とは、大まかに言うと、情報メディアを主体的に読み解いて必要な情報を引き出し、その真偽を見抜き、活用する能力であり、「情報を評価・識別する能力」と言えます。

ここでいうメディアには、マスメディア（新聞、テレビなど）をはじめ、映画、書籍または口コミ（口頭やインターネットのブログなど）といったさまざまなものが含まれます。

一つの物事について、さまざまなとらえ方があること、また、自分なりのとらえ方に基づき情報を発進できるということ自体は、思想・表現の自由上とても大切なことです。

しかし、さまざまな情報の氾濫する現代社会において、わたしたちは常に情報の取捨選択を迫られており、物事を自分なりに理解するため、メディア・リテラシーの重要性が高まっています。

人が二人いれば、話をする人とそれを聴く人がいて、その内容のとらえ方は、全く同じではないかもしれません。

今回取り上げたメディア・リテラシーを意識して、常に相手の立場やさまざまな角度から考え直してみる習慣というものが身につけば、人権感覚を養うことにもつながるのではないでしょうか。